

ら各班に割り当てられ、寝る場所を与えられました。

持ち物のない私達は、床に敷く物も体にかける物もなく、冷たい床に直接横になっていました。この病院では寝具の支給もなく、治療も薬品もなく放置されていたため、毎日死亡者が続出しました。私も折角ここまで快復したのに伝染病になり発熱して、意識がモウロウとなったことが何回もありましたが、幸いにも生き長らえて、三月末に北安の病院に移り、ハルビンで難民生活をして十月、コロ島発にて広島県大竹港へ帰国し、奇しくも骨折した十月二十日に松江市に到着しました。

シベリア抑留記

岡山県 片山 衛 真

一・終戦

興安嶺

私は終戦の時、興安嶺に関東軍歩兵三六一部隊第九

隊の一員として従軍していた。

戦後四十数年過ぎた時、興安嶺進攻作戦がソ連特集としてNHKで放映された。ソ連特集によると、ソ連重戦車隊は重装備された関東軍を撃破、南滿に進撃すると、樹木を倒して前進する戦車が放映された。戦争を知らない世代の人がこの放映を見れば、興安嶺はソ連軍に突破されたと信ずる。真実は、興安嶺は終戦の日まで死守され、ソ連軍の進入を許さなかった。ソ連軍の戦車隊が興安嶺を通過したのは戦争の終わった八月十六日だった。樹木を倒して進撃する、その樹木は興安嶺では見られない木である。興安嶺には白樺の木が密生しているけれど、その白樺は一本も見られない。ソ連の興安嶺進攻作戦は、他の場所で作られた間違った報道が真実のように放映された。ソ連は、重装備された関東軍を撃破と言っているが、関東軍の主力は南方戦線に参加、興安嶺には軍の航空機、戦車の姿は見られず、迎え撃つ火砲もない。対戦車砲のない関東軍はいかに戦い、戦車の侵入を終戦の日まで死守したか。それは肉攻であった。肉攻攻撃、ダイナマイト

の詰まった木箱、木箱にある発火装置が紐で軍服上衣ボタンに直結され、木箱を抱いて穴の中、草の中より進撃する戦車に飛び込む。飛び込む時手を伸ばす。手を伸ばすことによりダイナマイトは爆発する。肉を散らして戦車を破壊していた。人間は死ぬ時手を伸ばす、これが肉攻であるとの教育された。

毎日、日暮れ前に、明日の肉攻隊員として出撃して行く。全員二十歳の初年兵である。戦陣訓に、上官の命令はその事の如何を問わず直ちに服従すべし、また上官の命令は天皇陛下の命令である、とある。その命令に従う者は初年兵達だった。肉攻隊員は生きて帰ることは許されなかった。もし生きて帰れば銃殺と定められていた。肉攻隊に指名された者は必ず爆死することになる。私は日暮れ前、広場に集まった肉攻隊員を見送ったことがある。死を前にして彼らは顔色は全く無言だった。工兵大隊訓示は「諸君の武運を祈る」、短い言葉、一杯の清酒を受け出発する。尊い若い命が敗戦も知らず終戦の日まで亡くなっていった。彼ら若者は何を考え爆死したのだろうか。

軍国主義教育で私が十四歳の時「忠孝一本」という校長の訓話があった。それは、国の為に、天皇陛下の為に命を捧げることは最高の親孝行であると。若者は純真だった。校長の話を通じて聞いていた。けれど、今爆薬を抱いて前線に行く兵士達は命を断つことで国に、天皇の為に尽くすことは忘れ去られている。それは勝利という目的を失っているからである。戦争を好む兵はいない。人間と人間の殺し合いを好む者はいない。ただ命令。命令に従い爆死していく。彼らは平和を願いつつ爆死したのだと思う。

八月十二日、西森班長（鹿児島出身）は初年兵約四十人を集め、肉攻隊志願者を求めた。私は誰よりも早く肉攻隊志願を申し出た。西森班長は「貴様は殺さぬ」の一言だった。肉攻隊は必ず爆死する。なぜ私は爆死を求めたのだろうか。肉攻隊に志願する、勇氣ある兵と思うだろう。しかし、私は勇氣ある兵ではなかった。私達には必ず銃弾に倒れる時が来る。死ぬ身であれば、生きる苦しみから逃れたい、早く死に場所を求めていたのだ。班長の「貴様は殺さぬ」、その一言で

死ぬこともできない。

その夜、夜間歩哨を命ぜられる。中隊では私一人のようである。歩哨勤務は重大な任務である。昨夜の歩哨勤務中、太田兵長は敵スパイに急襲され銃を持ち去られた。営倉で軍法会議を待っていると知らされる。私の立つ歩哨は野原だった。十五夜が近いのか、雲一つない東の空に丸いお月様が、星が輝いていた。野一面に草花が咲き乱れて月に照らされて美しい。こんなに美しい花園は見たことがない。小さなリス、蛇が無数に遊び回っている。戦争を知らず天国のような花園で戯れる動物たち、その花園で銃剣を持って立っている。昼間の空爆、地上での銃撃戦の銃声も今は静まり、風の音もない。一人立つ歩哨ほど故郷を思い出すことはなかった。生きることを忘れた兵士は東を見ては「さようなら、幸せに」と心の中で叫んでいる。お月様が愛する人の顔に似て、笑っている。そして泣いている。私の目にも涙が、二度と会うことはできないうと内地からの便り、写真を焼却したのに、今夜も故

郷を思い、忘れ去ることができない。重大な歩哨勤務を忘れ、敵前であることも忘れ、古里の山河、そして天国の花園に平和を追い求めている。遠くで狼が啼いている声が淋しく聞こえてくる。真夜中ゴソゴソと物音がする。銃の引金に指をかけ「誰か」。返事がない。合言葉である「山」と呼ぶ。「川」と返事をして出てきたのは西森班長だった。先刻故郷を思い涙を流していた私が、軍人らしく「歩哨勤務、異状はありません」と報告する。西森班長は「ご苦労、頑張れよ」、そして草の中に消えて行った。班長は、一人立つ歩哨を心配して来てくれたのだ。昼間「貴様は殺さぬ」、その言葉で今も生きています。そして、天国のような花園に出合うこともできた。帰って行く班長の姿はいつもより淋しそうに感ぜられる。

同年兵金光一等兵、温和な青年だった。銃声の度に草の中に頭を入れて動かない、銃を持つこともできない。戦争、人の殺し合い、その恐ろしさで精神に異常を来したのだ。敵ソ連の捕虜になり汚名を受け苦しむより自決をと、古年兵は火を吹く手榴弾を抱かせ即死

させた。同年兵の長友次夫君は腹部に銃弾を受け苦しみ、手当てのすべもなく絶命したと聞く。命を断つ時「天皇陛下万歳」を叫んだ。若者は命を断つ時、必ず「おかあさん」と叫ぶ。長友は私に話したことがある。彼は幼い頃、父母と別れ、多難な人生を送ってきたこと。母の愛を知らない彼の「天皇陛下万歳」の最後の叫びは、心の安らぎを「天皇陛下万歳」に求めたものと思う。部下を思う西森班長も、世を去る若者を送る度に悲しい思いをしているのだ。

戦友

歩哨勤務が終わり八月十四日朝、兵舎に帰る。兵舎には友が一人、私の帰りを待っていた。同年兵達は行き先は分からないが出動していた。彼は今夜、肉攻隊員として出発する指令を受けていた。彼とは入隊の日より床を共にする戦友だった。彼は近眼で夜間行動には困っていた。銃、靴、帽子と私の手より彼の手に、私は不自由な彼を助け、彼もまた私を頼りにしていた。「集合」には二人は後から走って行った。班長は二人の仲を良く知っていた。明日爆死する最後の一日

を二人で過ごさすために昨夜の歩哨に、そして彼と二人での時間を作ってくれたのだ。彼は、明日爆死するその悲しみを忘れようと笑顔で私に話している。兵舎は丸太を組み、屋根は枝葉が重ねてあるが雨が漏り、床の草も冷たい。二人は白樺の林の中で休む。銃撃音は身近に聞こえてくる。時折肉攻の爆発音が地を轟かせて入る。今朝の食事はなかった。食料も不足し草を食べている。彼に何もできない私は、死を前にした彼の髭を剃ることにした。髭を剃る音を彼は目を細め、気持ち良さそうに聞いていた。その目からポツンと涙が落ちた。その涙は母を思い出しか、私との別れの悲しみからか。今日まで助け合い励まし合った、肉攻隊に参加する彼に送るべき言葉は、戦車の爆破成功を願うことである。だが私は、今、私の前に元気でいる彼に「爆死を、成功を」と励ます言葉は出なかった。その言葉を彼は待っているように思い、帝国軍人でなく戦友とも思われない大変なことを話してしまった。「今夜前線に出たら夜間行動だ、そして個人行動になる。個人行動になったとき逃げろ、生きられるだけ生

きるんだ」。私は前後を忘れ、彼に強引に生きること
を勧めている。彼に生きて欲しかった。戦争は必ず敗
ける。おまえが爆死すれば父母は一生悲しみ続けるだ
ろう。親はおまえが爆死して喜ぶか、悲しむだけだ。
彼は口を閉じてしまった。何を話しても返事をしな
い。私も勝手なことを彼に言っている。誰よりも早く
肉攻を志願した。死を求めていた。それが、戦友が身
を散らすと思えば、生きて欲しい一念で無茶な注文を
言っている。彼は爆死を前にして私の発言に迷ってい
る。肉攻隊員が生きて帰れば銃殺されることは互いに
知り尽くしている、それを承知で逃げろと言う私が間
違っているのだ。

私が岡山を離れるとき、早朝、大勢の人が私を見
送ってくださった、幼い頃世話になった人々だ。二度
と再会できない人々。私を見送る人たちは無言で私を
見つめている。お宮の木の陰で見送る愛する人も、こ
の日のくるのを承知していた。送る者も送られる者も
相手の心を傷つけないために、思い残すことのないよ
うに、元気で帰ってきてとは言わない。私も元気で

帰ってくるとは言わない。互いに死別を覚悟しての別
れである。人間だ、生きたい、帰ってきて欲しい。互
いの心の中で願っている。それができないのが戦争な
のだ。南方の島は玉砕が知らされ、本土は空爆され、
都市は焼け野原と化している。戦場に行く者には死が
待っている。見送る人々に、私は国のために大和桜が
散るごとく御奉公し皆様に報いると最後のあいさつを
した。町内会長は、国のために出征する私に励ます言
葉、そして万歳三唱で送ってくれた。長い列になって
岡山駅まで見送ってくれる。

お宮の鳥居を過ぎた時、会長片山豊さんが私に近づ
き「必ず元気で帰って来い」。一言言って自宅へ帰っ
て行った。戦死を覚悟で岡山を離れる私には、「元気
で帰って来い」その言葉は残酷だった。愛する人も言
わないことを、町内会長は非国民だ。半感情的になっ
た私は苦しんだ。けれど、私を送ってくれる人々は軍
歌と万歳万歳で私を励ましてくれる。町内会長の残酷
な言葉を忘れ去ることができた。彼は明日、爆死が
待っている。その彼に、爆死する彼に励ます言葉でな

く、「生きる」という言葉は、彼を死ぬほど苦しめたことと思う。町内会長は死を決意して出征する若者を見て、二度と帰らぬ尊い命だが、帰って欲しい一念で出た言葉だった。私も今元気でいる。彼に生きて欲しい一念は会長と同じだったのだ。日暮れ前出発する彼を見送るのは私一人だった。互いに励ます言葉もなく、去って行った。

昭和二十三年、私が岡山に帰ってきたとき、彼より一通の便りが届いていた。深夜、草の中で爆薬を抱き戦車攻撃を待っているとき、片山の「逃げろ、生きろ」の言葉が忘れられず、母を思い敵前逃亡をってしまった。夜が明け肉攻攻撃を眼下で見た。同士を裏切り、一人生き逃れた。そして次々と爆死する友。逃亡した彼は日本軍に合流できない。合流すれば銃殺が待っている。興安嶺の山の中をさまよい歩く。食料はなく、靴は破れ、興安嶺の冬は早い。雪が降り、雪を食べて、草を探しては食べる。心細い日々だった。そして凍死寸前にソ連軍の捕虜になりシベリアに送られる。私より一年早く日本に帰っていた。私は、彼が元

気で帰っていてうれしかった。よく帰ってきたと返事を書く。彼が帰ってきたことは、西森班長も同年兵達も今でも知らない。興安嶺で肉攻隊に参加し、身を粉に散して終戦の日まで興安嶺を守った。逃亡したのは彼一人だろう。同士を裏切り、一人生きることを話した私。同士達のことを思うと、互いに喜び合うことはできない。彼は爆死していく友を思うとき、どんなに苦しんだことか。

五十年近く音信はない。戦争の傷跡は生きて帰っても痛み続けた。達者でいれば当時を話し合い、興安嶺の山野に眠る肉攻隊の人々に二人で、平和である日本を報告し、祈りを捧げたい。彼の逃亡した日は八月十五日終戦の日だった。終戦の日を知らず、肉攻攻撃は終戦の日まで決行され、興安嶺をソ連軍が通過したのは終戦の次の日だった。興安嶺は、ダイナマイトを抱き戦車に飛び込み、二十歳の若者が尊い命を散らし世を去った所だということを知っていただきたい。ソ連の興安嶺爆破、南進作戦の放映は真っ赤な嘘の報道である。

遺言状

四月の休日、初年兵は遺言状を書いて提出することになる。遺言状は、戦死の報告と同時に家族に渡される。出身地の役場に送られるのである。一枚の用紙が渡される。十九歳の私には、遺言状の用紙を見つめて書くことができない。同年兵達には、用紙が黒くなるまで書いている者もいる。軍人が遺言状を書く。遺言状、若者の遺言状は何を書いても相手を悲しませ、苦しめるだけである。兵は死が待っている。死んでゆく者は忘れて、残る人々は幸せを求めて欲しい。私は用紙の中央に「遺言状、武士に遺言は無し」八文字を書いた。私ほど短い遺言状はない。この八文字は迷った末に遺言状を書いたのに、故郷への思いが走り、悲しみ苦しんだ。私には帰りを待っている人がいる。二度と帰ってこないのを承知で留守を守っている。その人がいなくなったら、遺言状を書くのにこれほど苦しむ必要もないだろう。「武士に遺言は無し」、兵士は何も言い残すことはない。外見、兵隊らしき遺言状である。けれど、私を待っている人に対しては、人生を捨てた

冷酷な八文字である。二度と再会は許されない。いつの日か銃弾に倒れるときがある。帰らぬ者を待つ寂しさ、苦しみに、これほど心を傷つけることもない。愛する人の面影を追い求め、悲しむ、その苦しみを忘れようとしている。そして、人生を捨てた冷酷な遺言状になってしまった。戦のために書く遺言状、これは私達の世代で終わり、二度と若者が遺言状を書くことのない平和を願いたい。

前線に

八月十四日夕暮れ、友を肉攻に送って兵舎に帰ると、同年兵達は兵舎に帰り前線出発の準備をしていた。私は三小隊一分隊の兵士として配属になる。銃弾は五発の弾、交戦が始まり戦闘が開始されれば、一分もすれば撃つ弾はなくなってしまう。最後は銃剣で突撃命令、九中隊は全員、ソ連の機銃で射殺される。戦闘は明朝太陽が昇る頃。開戦すれば時間の問題である。「敵歩兵部隊接近」という知らせに、中隊は横一列になって布陣する。暗い夜だ。興安嶺の八月中旬は夜は冷えてくる。銃剣を持って前方を見つめている。

私の死ぬときが、私だけでなく戦友は、銃弾に倒れる、そのときを覚悟している。戦うのに銃はあれど弾はない。生きる道は完全に閉ざされている。関東軍最後の姿である。真夜中、分隊長矢野伍長が私を訪ねてきた。「片山、中隊と共に玉砕するのは犬死に同然だ、逃亡しよう。生きるだけ生きて馬賊をやろう、食糧のある場所も知っている」と話しかけてきた。その時、分隊長は愛媛県川之江横川出身であることを教えてくれた。そして生家は農家であることも。私に上官が出身を教えてくれたのは九中隊では矢野さん一人だった。初年兵は分隊長を神様、仏さまの存在と思っている。とても言葉を交わすことのできない人である。分隊長は「犬死にするより生きる道を」と。私はもう生きる勇気を失っていた。生きて苦しむより早く死を求めていた。上官の命令には絶対服従せねばならぬ。矢野さんの意に反し、生死を中隊と共にすることを話した。矢野さんは命令に従わぬ私を叱るでもなく、矢野さんも逃亡を断念した。戦う装備の少ない中隊、交戦すれば必ず殺される。戦わずして殺されるより、生き

るだけ生きようと話してくれた。分隊長の職務を捨て、私に話してくれた恩情のある優しい言葉だった。分隊長との会話は数分だった。けれど私には、五十年近く年月が去った今でも、昨日のこのように思い出される。

八月十五日、東の空が明るくなってきた頃、小銃の音が山野に聞こえてくる。その時、五一五部隊の一中隊が私達九中隊と交代のためにやってきた。敵を前にしての交代だ。弾薬、食糧の補給のためという。九中隊は上ってきた道を一列になって兵舎に帰って行く。交代した中隊は三時間後、全員戦死という知らせがあった。五一五中隊は死ぬために上ってきた。そして九中隊は全員無事である。九中隊は五一五の後を追いついて、常道である。しかし、命令を下す司令部が逃亡。若い士官であれば命令を待たず五一五の後を追いついて、九中隊は全員戦死している。中隊長稲垣中尉は召集士官だった。妻子ある隊長は命令のない行動を、死より生きる道を選んだのだ。終戦の日とも知らず、肉攻の爆破の音が聞こえて来る。爆発音の度に若い兵士

が身を粉に散して行く。肉攻隊が死守してきた開嶺陣地を離れ、鉄嶺に向かって山中に入り後退する。九中隊同年兵は現地入隊のため、満州各地より集まった兵士である。

岡山県出身の三村勉が大連より入隊してきた。岡山出身は中隊でも三村と私だけである。私が肉攻に一番に志願した。二番目に志願したのが三村だった。死を求めた者がまだ生きている。食糧も不足しているのか、草を食べるようになった。そして死に場所を求めて歩き続ける中隊。真夜中ソンドラ地帯に出て、腰まで濡れて渡河する。銃は水より守ることができた。対岸で木切れを集め服を乾かす。軍靴は破れ地下足袋で行動することになった。密林を出ると広大な草原に出た。八月十六日は雲一つない晴天だった。ひばりが天高く数羽舞っている。正午頃、前方にソ連戦車部隊が上煙を上げて南進するのが見える。昨夜は肉攻隊は出撃しなかった。兵器のない関東軍は肉攻、ダイナマイトを抱いて戦車に飛び込み終戦の日まで死守した。終戦を知らない我々中隊は、中隊長の戦車攻撃の命令に

従い横隊になって前進が始まる。軽機関銃と小銃の中隊、弾薬は不足している。戦車一台も止めることはできない。敗北。中隊の全員玉碎は明白。隊長は、この地が中隊最後の戦い、死に場所と定めたことと思う。今度こそ銃弾に倒れるときがくる。兵士達は死を覚悟している。戦車の走行する唯一の南滿に通ずる道路に近づいて行つた。中隊長は戦車攻撃を中止し、小休止を指示し、隊長一人で南下する日本兵の方へ歩いて行つた。

中国の人

草原で小休止する私達より南二百メートルほどの所に中国人の農家が一軒あった。広い草原に一軒だけの農家、その屋根の棒の先に赤い布が見られる。先刻まで日本軍の味方であった中国人の人は、戦車の通過と同時にソ連側の協力者に変身したのだった。その農家より、小柄な黒い支那服を着た老人が両手にバケツを持って歩いてきた。水を持ってきてくれたのだ。昨夜から水を飲んでいない兵士達は喜んで戴いた。美しい、おいしい水だった。「シェイシェイ、ありがと

う。喜んで飲む兵士の姿を老人は見つめていた。何も言わない老人。今は敵である。日本軍は十五年という長い間、中国の人を苦しめてきた。私は十八歳の春、二三八部隊に軍属として渡満してより、中国人に対して非人間的行為を重ねてきた。人の命を虫でも殺すように扱う悪い人間になっていた。敵である我々は銃を持っている。鬼のような日本兵。殺されるかもしれない。老人は、自分の幸せより他人の幸せを願っての水である。命の尊さを身をもって教えてくれた一杯の水を私は生涯忘れることができない。一度会った中国の人。老人の願いは我々に「命を粗末にするな、幸せな人生を」と願っているように思われる。敵である兵士に水を送る。日本人にできるだろうか。老人の豊かな心を、私は心の師として人生を送ってきたように思われる。トボトボと帰って行く老人。兵士は「シェイシェイ、ありがとう」と叫んでいる。私も大声で「シェイシェイ」と叫び、目に涙が。うれし涙というのはこれだろう。

降伏

水を運んでくれた老人が帰った頃、東の方より隊長が帰ってきた。全員整列して隊長の到着を待つ。帰ってきた隊長は、「日本は昨日正午、無条件降伏をした、この地において武装解除する」。話し終わった隊長は草の上に座ってしまった。早く死にたい、いつも心の中にあつた。戦いは終わった。銃を持たぬ。人を殺すことはない。殺されることもないだろう。心の動揺はどうすることもできない。心は死から生へ急転回している。幾度となく東の空を仰ぎ、「さようなら、幸せに」と心の中で叫んできた。今、東の空を見て、必ず元気で帰る。捕虜、多難な日はあれど、その苦しみに耐えて必ず日本に帰って行く。日本に帰る、思いもよらぬ時がきたのだ。戦争で多くの若い命を失った。この日が一日早ければ戦友との別れも、昨日九中隊と交代した五・五の中隊の兵も戦死することもなかっただろう。反対に降伏が一日延びれば、九中隊も興安嶺の荒野に眠って逝っただろう。三百万という命を断った戦争、中国は日本軍の侵略により死傷者は二千万人とも言われる。誰のため、何のための無謀な戦争か。日

本軍は罪もない多くの人を殺害した。当然その罰は受けなくてはならぬ。戦後の内地の人々も、我々以上に苦しい戦いを続けてきた。そして敗者の苦しみを味わっている。

武装解除、歩兵銃は天皇陛下より預かった命より大事な銃である。その銃との訣別、命より大事に扱った銃、銃との別れは悲しいことである。日本は戦争に敗ける、誰もが口には出さぬが思っていたことである。

武器弾薬はなく、食糧も乏しい。日本軍は最後の一兵たりとも戦う。本土決戦と思いつてきた。そして、この時を予想していた。武装解除も平然として行われ、寂しさを感じずるが、これで多くの命が助かれば、敗戦、降伏でよかつたとも思う。銃を捨てる。残念なことであるが、人間の殺し合いは銃を捨てることで終わった。国の為、天皇陛下の為に若者は信じ、尊い命を散らしてしまった。今、兵士達は国の為、天皇陛下の為に命を捧げる、その必要はなくなってしまった。若者は母の国日本が恋しい。一日も早く日本に帰りたい。戦友三村、田中、仲田も、顔を会わせれば早

く帰りたいと。ほかに話す言葉もなく、武装解除を終る。他の陣地より南下する日本軍に合流し鉄嶺に向かう。

鉄嶺

鉄嶺は興安嶺各陣地の物資補給基地であり、軍の施設のあるところ。鉄嶺に集まった兵士達は放心状態になって食べ物を探している。昨夜、乾パン一袋が支給されてより食べていない。多くの軍人、軍属の官舎があった。逃げる前に用意したのか、釜の中に飯が残っていた。その飯を兵士達は食べている。昼、ソ連戦車が通過した頃だろうか、若い婦人が幼い我が子を殺し、自害していた。血は新しく、赤く染まっている。軍人の妻らしく自らの手で命を断っている。生きるために兵隊は釜の飯を食べている。十円札、百円札が吹かれて舞っている。誰も集めようとしなない。無用となった空しい紙切れである。主人なき官舎の家財道具を中国の青年が車で運んでいる。誰も止める者もいない。冷たい風が吹いている。敗戦の苦しみを味わう。

日暮れ前、最終列車が出発する。命令はない。集ま

る方向に歩く。戦う目的を失い、気力もなく、鉄嶺駅に。貨車に乗り込むと、列車は待つていたかのように入東に走り出した。列車の走る音が「日本に」と聞こえて来るようだ。寒くて兵士達は丸くなって横に寝ている。深夜、列車は急停車する。義勇軍の若者が列車を止めたのだ。手に竹槍を持って私達の貨車に乗車する。列車は走り出した。若者達は「兵隊さん、戦場に連れて行って」と口々に叫んでいる。私は彼らに「戦争は終わったのだ、日本は降伏した、竹槍はもう必要ない」と。若者は大声を出して泣いていた。彼らは、義勇軍に志願した十四、五歳の青年だ。東北地方の出身である。父母と別れ遠く北滿の守りに参加していたのだ。それにしても指導者達は、竹槍で交戦する訓練をしていたのだ。百人の竹槍も一丁の自動小銃には勝てない。少年達に死ねと予告しているようなものだ。若者ほど純真だ。敗戦を知り、泣き叫んでいた。我々兵隊は、終戦を知っても涙を流す者もいなかった。敗戦、来るべき時が来たと受け止めていた。少年達は日本の勝利を信じ、竹槍を持って戦う決意で前線にと乗

車してきた。昼間の疲れに、泣いていた彼らは深い眠りについた。上官の命令は絶対的なものだった。けれど、興安嶺では指揮指令を下す幹部将校は、敗戦を知ると先に姿を消してしまった。義勇軍の若者達を指導する人たちは最後まで行動を共にしないで、別れ別れになった。五人の若者が乗車してきてよかったとも思う。北滿の広野には寒い冬がやって来る。零下三十幾度の冬。食糧のない広野では生きることができない。彼らも戦死を覚悟での戦い。戦い終わった今、眠る少年の幸せを願わずにはいられない。

二・捕虜

フラルキ

鉄嶺を出発して初めての駅、フラルキで停車。海の見えるところまで、港の見えるところまで走り続けて欲しい、その願いも空しくフラルキで下車、休息のために兵舎に行く。フラルキも鉄嶺と同じで、軍施設の駅だった。民家は見られない。フラルキは初年兵教育隊として入隊したとき連れてこられた兵舎である。雪の降る寒い頃だった。屋根だけ地上にあり、寒さに耐

えるため生活は地下で、電灯も水道もない寂しいところでの訓練だった。

日暮れ前に出発との知らせ、ソ連の指示である。行き先不明の行軍は体力を失う。苦しい行軍。ソ連軍の監視兵が左右に同行する。時々彼らは空に向け発砲。

「ダワイダワイ（早く歩け）。小羊が追われるように歩き続ける。用便のため隊列を離れた者が射殺されたと聞く。隊列を離れると殺すという警告でもある。小休止には道路に横になつて休息する。溝にある汚い水を飲む兵士も見られる。戦友三村勉は行軍に弱い。彼の所持する物を私が持って歩く。励ます言葉も叱るように言っていた。隊を離れると死が待っている。なんとか隊について行かねば。私は行軍は強い方だった。牛が歩くようにねちねちと歩いた。夜が明ける頃、チハルの町に到着することができた。町の入り口には日本人の婦人、老人達三十名くらいの人が待っていた。肉親、友人との再会を願っていたようであるが、再会できた者はいないようだ。

チハル

チハルに到着した私達はチハルの兵舎に収容される。わずかな粟の粥であるが三度三度支給され、使役もなく人生の空白のような日々を過ごす。水が不足しているのか顔を洗う水もなく、汚れた下着にシラミがわく。つぶしても断つことはできない。夜中には南京虫が出没する。捕虜の人員確認のためソ連軍将校が来る。広場の中隊ごとに整列し点呼を受ける。ソ連軍責任者は女性将校だった。男性佐官、尉官、数人を従えて中隊の前を勝利者として歩いて行く。北満の守りに従軍した関東軍の将兵は、ソ連女性によって完全に捕虜が確認された。残念無念、どうすることもできない。約二千人の兵士が出発することになった。九中隊も全員同行することになり、行き先は「日本に帰る」。情報は何も知らされない捕虜であるが、伝言で「日本に帰る」。その言葉を信じフラルキに行軍する。ソ連軍監視兵は我々に「東京ダモイ（東京に帰る）、ヤボンスキー、ダモイ（日本兵は帰る）」私達に知らずかのように話す。日本に帰れる、その喜びもあつてか、歩く足も軽くフラルキ駅に向かう。

列車は東か西か

フルルキ駅には赤い貨車が待っていた。赤い貨車。ソ連の列車である。貨車にはストープが用意されている。シベリアに送られるのでは？ 不吉な予感がする。ソ連兵の「日本に帰る」、その言葉を信じ、貨車に同乗の兵士は列車が東に走ることを願い、信じている。下車するまでの食糧として乾パン三袋が支給された。早朝わずかな粥を食べてよりの乾パン。列車が発するまでに全員が食べてしまう。日の暮れた貨車の中は、友の顔も見えないほど暗い。列車が東に動き出すか、西に動き出すか、東に動くことを信じているが西にという不安も残っている。東に走れば日本が近くなる。西に走れば日本が遠くなる。兵士達は無言で列車の出發を待ち、東に、母のいる国に走ってくれることを願っていた。深夜、出發の汽笛が鳴る。ゴトゴト、ゴトン、西だ。貨車はシベリアに向かって走り出した。兵士達は異様な「ウー」、なんとも言えない声だった。二十歳の若者は母が恋しい。母と遠く離れていく。泣いている兵もいた。日本に帰ると喜んで列車

に乗った。その貨車はシベリアに。ソ連は、シベリアに送ると言えば逃亡者、反乱者が出ることを予想してか、甘い言葉で貨車に乗せてしまった。この方便は、ソ連では通常使用されていることを知らされた。

戦場跡

翌日、私達の激戦地興安嶺を通過する。美しい白樺の樹葉も黄色くなり、風に吹かれて舞い落ちていた。日本兵士が当時のまま伏している。あそこにも、ここにも黄色の軍服が寂しく目に入る。同乗の兵士達は、過去を思い出したくないのか、見ようともせず横になっっている。私は貨車の小窓から見つめた。軍馬も倒れている。日本軍の兵器は小銃一丁も見られない。ソ連軍が戦利品として持ち去ったのだろう。戦死者のみ放置されていた。私は今も生きてシベリアに送られている。その悲しみは死ぬほど苦しい。

国境

日暮れ前、ハイラルに初めて列車は停車した。ハイラルは国境の町、軍隊の町だった。私達の原隊も、この町に三カ月ほど勤務した思い出の町である。今は人

影もなく寂しい町と化している。ハイラルを出発すれば国境である。共産主義ソ連のことは何も教育を受けていない。寒い国、恐ろしい国、知ることはそれだけだ。未知の国ソ連、ソ連で何が我々を待っているのか。列車が国境を通過するとき、誰が歌い出したのか。「ハイラル小唄」。さらばハイラルよ、また来るまでは……」、貨車の兵全員が歌い出した。暗くて友の顔が見えない。歌が終わればまた初めから幾度も繰り返し返して歌い続けられる。歌って故郷を思い、そしてシベリアに送られる悲しみを忘れようとしている。泣いて歌っている兵士もいる。この悲しみに耐えられない一人の兵士が「お母さん」と叫んだ。歌は「お母さん」の叫びとともに消えるように終わってしまった。列車は容赦なく西へと全速力で走っていた。

三・シベリア鉄道

バイカル湖

列車が二日走り続け停車するほどシベリアは広大な原生林と草原で、途中、道路も民家も見られない。バイカルの湖畔を列車が走ったときは、瀬戸の海を思い

出すような美しい湖だった。岸壁を走る列車。波一つない湖上を白い波を残して走る小舟。日本の沿岸を走っているようだ。

イルクーツク

シベリアの冬は早くやって来る。夜は零下幾度と日々寒さは増して来る。乗車して六日間、九月十日、イルクーツクに停車したとき、木切れを拾い集める。シベリア送りの捕虜列車は初期であろうか、木切れを集めるのに手間は必要なかった。乗車するとき、下車までの食糧と乾パンを支給されてより給食はなく、体力が衰え、寒さは増し、体が自由に動かぬようになる。木切れを集め乗車したとき、ソ連軍病院列車がホームに入ってくる。日ソ戦で傷ついた兵士達だ。ベッドに横になったまま、我々に向けてピストルを乱射してきた。急ぎよ貨車の戸を閉める。木製の貨車にプスプスと弾が命中している。日本兵に傷つけられたソ連兵士達、彼らは戦争勝利者として終わった。けれど、傷つけられた傷みは不具者として一生不幸な人生を送らなければならぬ、その苦しみから我々に向けて

のピストル乱射であった。病院列車は先に発車、後を追うように捕虜列車も走り出した。集めた木切れで貨車のストープを焚き暖をとる。先頭の機関車の煙突、数十の貨車の煙突から煙を吹き出し走る姿はシベリアでなくては見られない。そのころ初めて死亡者が出た。栄養失調という。鉄橋を渡るとき河に投下する。

無名の駅

私達にはわからない小さな駅に停車したときのことである。乗車して十日は過ぎている。立つのも苦しいほど体力を失って兵士達は横になり、話す者もない。二人のソ連兵が乗車してくる。一人は小銃を我々に向けている。一人は片手に小刀を持ち、片手で横になって休む日本兵の所持する万年筆と時計を捜し始めた。体力を失った兵士達は彼らの行動を見守るだけだ。数個の万年筆と時計を戦利品を得たかのごとく笑って持ち去って行く。捕虜は勝利者に対して従うほかに道はなく、私達は人里離れた雪原で重機関銃で射殺されるのではない、日本兵が次々と倒れていく夢を見るようになった。

乗車して十二日目の夜、列車は引込線に入り停車、クラスノヤルスクという町。「下車、下車」の声。十二日間食べていない。その間、貨車輸送で疲れている。よろめき歩く。小雪が降っていた。ホームの暗い明かりに雪がキラキラと輝いている。十センチメートルほど雪が積もっていた。下車と同時に行軍が始まる。ソ連軍監視兵が左右に同行、「ダワイダワイ（早く歩け、早く歩け）」とやかましい。体力のない行軍、これほど苦しい行軍は初めてだ。死の行軍とはこのことなのか。戦友三村は弱っている。私は三村に肩を貸し、彼を励まして一歩一歩と歩く。歩く足は重く、足がもつれ二人は転ぶ。倒れては起き、また倒れる。三村は気力を失っている。顔は夜空に向いている。体は前に出るが足が出ない。三村は夜空に向かって「お母さん」と叫んでいた。目に涙が流れていた。雪の上に倒れる二人。「三村頑張れ、頑張るんだ」、叱るように励ます。私の母は昨年病死しているのを知っている。優しい母の顔が浮かび、「頑張って、頑張って」と私を励ましている声が聞こえて来る。体力の限界だ。倒

れて動かぬ兵もいる。ソ連兵は情け容赦もなく早く歩
けと叫んでいる。暗闇の中を白い雪に靴跡を残し、長
い列になって歩いていく捕虜の集団。地獄の道を歩い
ている。前方に収容所の明かりが見えたとき、生き
る、生きることができると思う。「三村、あの灯が見
えるところまでだ」、励まし歩く。二人は収容所に、
兵舎の中に入ることができた。少量ではあるが温かい
粟の粥が支給される。十二日目に口にする粥である。
この粥でまた生きることができたと思う。

四・収容所

クラスノヤルスク

収容所名はクラスノヤルスク二十一地区第九収容
所、収容所長ミカセ大佐と聞く。けれど、収容所名を
記した物は見られない。所長ミカセ大佐にも一度も出
会ったことはない。超秘密主義のためか、町名、工場
名、門札、看板等字を書いた標識が見られない。シベ
リアの中央に位置したこの町は動植物も育たぬ寒冷地
であり、九月下旬より四月上旬まで零下三十度より温
かくならない。零下三十七、八度の日が最も多く、四

十度を超す日も度々ある。

体感温度零下六十度、寒さに耐えて作業場に向か
う。そんな時は、日本に帰りたい、他に考えること
のない我々はこの寒い土地を早く離れたかった。人の住
まぬ土地に、流刑者、罪人の町、数十万の人々が酷使
されている。銃に囲まれた集団によく出会う。収容所
は十一棟の兵舎に二千人が収容された。収容所は高い
塀で囲まれ、上部には電流が流されている。要所に高
台が作られ、夜間照明灯で照らされていた。兵が小用
のために塀に近づき射殺された事件があった。塀に近
づく、近づく、と殺すという警告である。便所は収容
所の中央部に一カ所作られていた。戸も門きりもない
風通しのよいところだ。零下幾十度の中でも生きる限
り使用しなければならぬ。食べる物が不足し食べな
いためか、便所に行く回数には少ない。休日の度に使役
でツルハシを使用して取り除くのであるが、大便は固
く凍り、長い時間が必要だった。汚物は車でエニセイ
川の氷上に捨てて行く。寒さのために水道設備はな
く、手を洗うことも顔を洗うこともない生活だ。

寒さに耐える

初めてのシベリアの冬、ペーチカはあるが燃料がない。ソ連側は燃料を支給しない。室内でも零下幾十度、防寒具を着用したまま眠っていた。防寒帽の口の周りは白く凍っている。食糧不足、強制労働、体力は弱まっている。その上、暖をとる燃料がない。毎朝四、五人の兵が冷たくなって逝った。前日まで働き、夕食を共にした兵が、痛みを訴えるでもなく死亡していく。作業場で石炭を盗んで帰るようになってから死亡者も少なくなってきた。ソ連は死亡者に対して冷酷だった。寒さのために死亡してゆく。ソ連の役人達は知っていても燃料の補給はしない。

五・四中隊

四中隊の作業

到着後、作業中隊に再編成され、私は四中隊に。同年兵では私と三村勤、畠山満、3人が働くことになる。他の中隊より集まった二百人の兵が内藤中尉に従い作業場へ。作業はコンバイン（農業機械）の鋳物部品を作る工場である。四中隊は収容所で最悪の作業で

あり、死中隊とも殺人工場とも言われるほど、労働に耐えられず死亡者が多かった。作業ノルマ成績は毎日表示され、作業ノルマを工場長は強要する。内藤中尉は兵の苦しむ姿を見て、工場長に度々反論し、ノルマの引き下げを要求していた。そのために四中隊を追われ、上原少尉が四中隊の隊長になる。上原少尉は苦勞を共にする。大田兵長が便所で首吊り自殺をしているのが、作業が終わり収容所に帰る前に発見された。また作業中行方不明になった同年兵の一人は、翌日貨車の中で凍死体で発見された。貨車は車輪のない廃車であるが、動かぬ貨車でも日本に帰る夢を見て凍死したのであろう。食糧不足に寒さ、体力のない兵が重労働を強制される。四中隊の中では、その苦しみに耐えられず世を去っていく兵もいた。

納塚一等兵

納塚一等兵は四中隊で初めて知った兵であり、私の左側で床を共にしていた。小柄で角顔で眼鏡をしていた。終戦前に召集された新兵であり、四十歳に近い老兵だった。新兵である彼は古年兵の指示に従い、よく

働いていた。口数の少ない温和な人である。今日も変わらず作業から共に帰り、夕食も共にする。食後は作業の疲れで横になり休息。いつも早く横になる彼が座って写真を出して見つけている。妻に「子供達を頼む」と、子供には「母を大事にして、勉強をして」と妻子に話している。納塚の顔に涙が見られた。いつまでも妻子との会話は続けられた。私は「納塚、明日も作業だ、早く休むように」と話す。納塚は横になった。朝早く起きる彼が起きない。呼んでも返事がない。良く見ると冷たくなっていた。死ぬことがわかっていれば妻子との会話を中断させないのに、死は予告なくやって来る。痛みも苦しみもなく、自然に死亡していく。死者に対して誰一人悲しむ者はいなかった。それは、誰もが今日の命、明日の命が知れぬからであり、いつ倒れても不思議のないほど体力が弱っていた。納塚は満州鞍山製鉄所に勤務、終戦直前召集された。北滿に來た運の悪い男だった。温和な彼は私以外の者とは話さず、軍隊を知らない彼はよく私に尋ねていた。彼は大分県出身と話していたが、彼の死を妻子に

知らせることはできなかった。納塚を残し作業に帰ったときには撤収され、その行き先はわからなかった。

鬼の曹長

四中隊で初めて某曹長と出会った。以下の事件がなかったら彼の名前も知らなかっただろう。休日の日で、同年兵、原隊は知らない。食い物を探したという理由で初年兵が曹長に制裁を受けた。収容所内にはネズミ一匹もない。食い物を探したというのは、理由なき制裁だ。温和な好青年だった。彼は上半身裸にされ、両手を上に上げる。曹長は帯革で彼の裸を打つ。打つ度に異様な声を発していた。白い体に打つ度に青い傷ができる。体力の弱っている兵、気を失って廊下に倒れてしまう。曹長は自分の席に帰って行く。私と畠山、三村の三人で倒れた兵を介抱する。「頑張るんだ、元氣を出すんだ」氣のついた彼は「お母さん、お母さん」と叫んだ。その声を聞いた曹長はまたも出てきた。「貴様にはおふくろはいない」と、またも彼を打つ。曹長は鬼だ、人間ではない。許しを願えば自分

が打たれる。誰も止める者はいない。兵はまたも気を失ってしまった。曹長が帰った後、三人で介抱したが、冷たい体は二度と温かくならなかつた。ソ連側には病死と報告された。遠くシベリアに捕虜の身となり、帰国を夢に苦しい生活を過ごしてきた日本兵士が、日本人によって暴力を受け死亡してしまつた。軍国主義思想が残り、理由なき理由で殺された者がいる。「暁に祈る」の私的制裁は、古年兵が初年兵、新兵に対して行つた軍隊生活の延長である代表的行為だつた。曹長は甲府市出身と聞いている。帰国したら殺人罪で告訴してやろう。初年兵の彼があまりにかわいそうであると思つた。しかし、死亡した同年兵の出身地、氏名がわからず、最後に叫んだ「お母さん」の言葉は今も聞こえてくるようだ。

同年兵三村勉

三村勉は唯一人、岡山出身の同年兵である。入隊時より互いに励まし合い、助け合つてきた。

二十一年四月、寒い冬を耐え暖かくなつてきたが、シベリアの四月はまだ零下二十度と防寒具を着用して

いた。一日の作業が終わり收容所に帰り始めた頃、三村が隊列を離れて行くのに気づき、私も三村と二人で收容所に向かつて歩いて行つた。監視兵は何も言わないうで私達二人に同行してくれた。先刻まで元気で作業していた三村であるが、急速に体力が失われていく。

三村に肩を貸し、よろめく三村を励まして歩く。体は痛むようではない。三村は私に「もう駄目だ、帰つたらおふくろによるしく頼む」「何を言つてるんだ、頑張るんだ。二人で岡山へ帰ろう」。三村は話す気力もないほど体の調子が悪い。多くの兵が死亡して逝つた。その死亡者に対して悲しみを感ずることはなかつたけれど、弱つていく三村に対しては別だつた。元氣になつて欲しい。戦時中、三村は「片山、おまえが戦死したら必ず骨を岡山に届ける」と言つてくれたその三村が「もう駄目だ」、その言葉は悲しかった。どんなことがあつても元氣になつて欲しい。收容所の入り口近くにある医務室に連れていくと、ベッドが一床空いていた。三村は横になり目を閉じたまま「岡山に帰つたらおふくろに頼む」、その声を最後に眠つたよ

うに休んでいた。深夜になって「明日も作業なので兵舎に帰るが、頑張ってくれ」と言ったが、三村は返事をする気力も失われていた。医務室を出た私は東の空に手を合わせ、三村の元気になることを祈った。三村の弱り切った顔を思い出して泣いていた。兵舎に帰っても三村の病状が気になり眠れない。先日、一枚の写真を見せてくれた。折り目もなく大事に持っていた。兄夫婦と兄の子息と共に写っていた。三村は兄嫁を、母のようによくしてくれたと喜んでいて、大連でのことである。

早朝、私は医務室に走った、三村の元気な姿を求めて。けれど、三村のベッドは空床になっている。他のベッドに休む兵に「このベッドの兵は」と尋ねる。返事は「ソ連兵が連れていった」「死んだのか?」「生きていた」という返事。収容所の医務室とは名のみで医師も看護人もいないし、一粒の薬もない。三村は他の設備のある病院で手当てを受け元気になる、私はそう願っていた。今まで重症患者を連れ出した話は聞かぬが、元気で帰ってきた兵は一人もない。行き先

も生死も不明である。私は三村の病状では駄目だと思いつつも、必ず元気になる、そう信じていた。

昭和二十三年十月、私が岡山に帰ったとき、三村の実家新見市へ、三村が元気になって早く帰っているのではと便りを出す。数日後、父親が私を訪ねて来られた。息子の音信はなく不安な毎日を過ごしていたときに、私の便りで喜んで来たようである。三村勉と別れた当時を話し、「三村は元気で帰って来ると思う」と、どうしても私は三村の死を信じることはできなかった。三村の死に立ち会っていないためでもある。私は帰ったとき「死亡」になっていた。幾度も死を逃れ生きて帰った私、「死亡」として報告されても仕方のないことである。けれど、帰らぬはずの者が帰った。それまでの悲しみ、その苦しみは計り知れない。「片山は死亡」と報告した人は、決して悪意で報告したのではない。死体を見ないで報告したので違っていたのである。三村が万一元気で帰ったとき、私の苦しみを味わってはと思うと、三村の死を見届けていない私は父親に「死亡」と報告はできない。

一年後、再度父親は岡山に来て、「息子は帰ってこない、死亡確認書を役所に提出したい」と言われる。

息子の墓を建てたい。また戦時死亡年金、保険等の都合もあるらしい。三村と別れた日を命日として、病名を「栄養失調」と書類に記入する。そして父親にお願いした。「万一生きて帰ってきたら喜んで迎えて欲しい」。大変な死亡確認書である。私の心の中では、三村は必ず死んでいる、いやそうではない、元気で帰って来る……、その思いが十年、二十年と続いた。

寒い小雪が降る日だった。三村の告別式の知らせを受けた私は新見に行った。シベリアから着て帰った軍服で、戦友として一人参加した。三村の死を同年兵達と同じ収容所においても知らぬほど、苦難の日々を過ごしていたのだった。長い列になって墓地に歩いていく。その中に白木の箱が送られていく。白木の箱を見た時、涙を止めることはできなかった。三村はシベリアに、三村の骨は……。 「おまえの骨は必ず岡山へ届ける」と言った三村。その三村の白木の箱には遺骨も遺品もない。ソ連では遺骨、遺品の所持は許されず、

もちろん日本に持って帰ることはできない。五十年近くなる。三村は帰って来なかった。六万というシベリア抑留死亡者の一人だった。

三村勉、関東軍の一兵士の死亡も世間から忘れ去られようとしている。

私も倒れる

二十一年十月、四中隊、死中隊、殺人工場の異名のごとく一年過ぎたとき、二百人の隊員も二十人足らずになってしまった。私は鋳物の型を作っていた。ノルマを強要され、連日酷使され体力は衰えていた。

午後の四時頃、急に体調が悪くなってきた。体の痛みは何も感じない。立つことができず、黒い砂の上に横になった。その砂を握っていた。工場長が通ったが、何も言わず通り過ぎて行く。工場の機械の音が遠くに聞こえて来る。死の順番が私にやって来た。自分の死を確認するかのようになり、来るときがきた、何も不思議ではない、今日までよく生きてきた。故郷を思い出している。「辛せに、さようなら」。戦友畠山がノルマで働く手を休め、「作業が終わるまで頑張っている」

一言言って去った。

その後のことはわからない。私が気がついたのは次の日の正午頃だった。私は医務室にいた。私の気のついた姿を見てソ連人看護婦さんが大変喜んでくれた。日本語で「ヨカッタ、ヨカッタ」「元気になって父母のいる日本に帰るんだ」と励ましてくれた。同室の兵によると、彼女は夜中眠らず看病していたとのことである。今まで収容所には看護婦さんがいなかった。私が倒れたとき看護婦さんがおられたことは不思議であつたと思う。医務室には医師も薬もなく、手当てのすべもない。看護婦さんは私が元気になることを神に祈り続けたに違いない。看護婦さんに心から礼を言った。その看護婦さんもその日から収容所では見られず、また二度と収容所で看護婦さんを見ることはなかった。私は気がついたとき、私は運の強い男だと思った。だが、そうでなく、倒れて気を失った私を、畠山達戦友が戸板に乗せて医務室まで運んでくれた。そしてソ連看護婦さんの手厚い看護、みんなの人に助けられ、守られ、死から生還し、暗い道から抜け出て

明るい道を歩いている。

時間が過ぎると私の体調も良くなってきた。生まれて初めてベッドに座り、東に向かって手を合わせた私は、みんなに助けられて生きることができた。私は泣き虫だ。涙が落ちていた。医務室に入った者は必ず死亡していった。私は、入室した兵が元気になった話は聞いていない。私の元気な姿を畠山、仲田、田中が見舞ってくれた。みんな喜んでくれた。私の知らぬ兵が、「早く行くところに行け、後の者が困る」と言う。私も負けず、「今に行くから、今に死ぬから少し待ってくれ」。それほど入室者は死亡していったのだ。九死に一生を得た私は、入室五日目には退出することができた。医務室には医師も係の者も不在であり、入退室に届けは必要ない。入室は失神状態になった兵を連れ込む。私は自分の意志で医務室を出ることにした。病人の記入事項もなく、誰が病気になったか残る書類はない。退出後、私は四中隊に帰らず十一中隊に行くことになった。十一中隊に行く理由は私には不明であった。隊長は温和な、部下を思う内藤中尉だっ

た。

捕虜番号「九九九」

愛媛県 大久保 正 一

私は捕虜番号が「九九九」でありました。数字が覚えやすかったせい、か今も忘れませんし、「九九九」を口にするのが当時のことが思い出され、ぞっとします。

私は、大正十二年十月十五日生まれで、地元の高等小学校を卒業し、村役場（当時は村でしたが三カ村合併、小田町になる）に就職し、その後、陸軍通信学校（神奈川県相模原町）に第八期生として入校しました。家業は建設業で、構成は両親・兄・私・弟・妹二人の七人家族で、兄は予科練七期生（昭和十七年東部ニューギニアで戦死）、弟は少年高射砲学校卒業後赴任途中、東シナ海で戦死しました。男三人中私一人が生き残りました。

私は陸軍通信学校第八期生として、昭和十五年十二

月に入校し、昭和十七年十一月に卒業、卒業と同時に関東軍司令部新京通信所に配属となりました。仕事は関東軍（今の中国東北省）内の各軍司令部との無線通信連絡と、大本営との無線通信連絡が主の仕事でした。その後、昭和二十年五月、安東通信所長を命ぜられ赴任しました。当時戦況は日本の優勢が伝えられ、国民も丸となり、必勝を信じ戦っておりましたが、六月も過ぎた頃、関東軍の参謀をされておられた某参謀（宮殿下）が急に東京の大本営に帰任されました。仕事柄何か不安を感じ、戦況の厳しさを感じた次第です。

八月九日、ソ連軍の参戦となり、事の重大さを無線通信電報の頻繁さで感じ、「ソ連は参戦しない」と信じていた日本の外交の甘さを、しみじみと感じました。

軍の無線電報は機密保持のため全部暗号による数字電報でしたが、八月十五日「ライライ」という緊急電報が飛び込み、それも「ナマナマ」という暗号電報でない、そのものずばりの電報が終戦の電報でした。信